

伊澤修二の日本語教材『東語初階』・『東語真伝』

谷 口 知 子

Teaching Materials for Japanese, *Tōgo Shokai* 東語初階 (First Step for the Eastern Language) and *Tōgo Shinden* 東語真伝 (True Transmission of the Eastern Language)

TANIGUCHI Satoko

After the Sino-Japanese war, there were increasing needs for Japanese and Japanese courses were established within the institutions for the study of foreign language in China. Accompanied with the establishment of the course, the publication for teaching materials for Japanese started in China. For instances, *Tōgo Shokai* 東語初階 (The First Step for Eastern Language) and *Tōgo Shinden* 東語真伝 (True Transmission of the Eastern Language) both of which were supervised by Izawa Shuji 伊澤修二 were published in 1902 and in 1903. These were the early materials for Chinese to study Japanese and edited under the aim for mastering the oral conversation. The Learning method to include the practices of sentence patterns was quite new, which had not been observed amongst preceding materials for Chinese to learn Japanese. Izawa Shuji had already adopted this method of practicing sentence patterns while he had been the chief of Faculty at Taiwan Official Government. These two materials were the texts which were edited and improved preceding texts used in Taiwan and which were the text that gave great impact upon following teaching and learning materials for Japanese published both in China and in Japan.

はじめに

アヘン戦争（1840-1842）後、清政府は外国語のできる人材の育成に迫られ、また西洋の文明を採り入れるため、外国語の教育機関として北京に京師同文館を設立し、英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語などの外国語教育を開始した¹⁾。地方では、1863年上海に広方言館、1864年広州に広東同文館が設立された。日清戦争（1885）後、中国では日中貿易や来華日本人が増加する。1897年京師同文館と広東同文館に東文（日本語）館が設置され、日本語教育が開始された²⁾。またそのころ日本への中国人留学生が急増する。

日本語の需要が増す中、19世紀末から中国と日本で、語彙集や語学書の出版が始まる。それらの中で、『東語初階』・『東語真伝』は先端的な学習方法を採用入れた日本語教材である。しかしこれまで両書の学習方法に言及した研究はなく、そのため両書の内容はあまり知られていない。本稿では、『東語初階』・『東語真伝』はどのような学習方法か、その方法はどこからきたか、どのような影響を与えたかについて考察し、両書の日本語教材としての位置づけについて考えてみたい。

1. 『東語初階』・『東語真伝』前後の日本語教材

『東語初階』・『東語真伝』の前後に出版された日本語教材を以下に示すとともに、それらの内容について簡単に紹介する。

- ① 1884（光緒10）『東語簡要』玉燕（『纂輯 日本譯語』。京都大学文学部 / 国語学国文学研究室編。）
- ② 1895（明28）『東語入門和文読本入門東文法程』陳天麒、商務印書館編譯。
- ③ 1900（明33）『東語正規』唐寶鏢 / 戡翼鞏著。上海：作新社。
- ④ 1901（明34）『日語入門』長谷川雄太郎著。東京：善隣書院。
- ⑤ 1902（明35）『東文易解』大矢透著、金国璞・張廷彦同校。東京：泰東同文局。
- ⑥ 1903（光緒29）『東語完璧』新智社編輯局編纂 臺灣協会学校教授 燕京馬昭紹蘭君序文。上海：新智社。（印刷東京5.26）

1) 安部洋監修2006「第二章近代学校の教育」『中国教育史』p.119-120（『中国近現代教育文献資料V 中国教育史』）。東京：日本図書センター。劉建雲2005『中国人の日本語学習史—清末の東文学堂』P.70-74。東京：学術出版会。陳東原1936「第27章新教育之萌芽時期」『中国教育史』P.461-46。台北：台湾商務印書館。広東省地方史編纂委員会編1995『広東省志・教育志』p.49。広東佛山：広東人民出版社。

2) 劉建雲2005 p.74-75。広東省地方史編纂委員会編1995 p.49。

① 『東語簡要』（1884）

本書は1884年に出版され、著者は玉燕である。語彙と一字門、二字門、三字門、成句門からなる語彙集である。

② 『東語入門和文読本入門東文法程』（1895）

本書は1895年（明28）に商務印書館から出版された。著者陳天麒は日本に6年余滞在し、ある程度の日本語能力を有す。序文に、本書は交流の場や貿易の場、日本人との商談に役立つとある。本書は一冊、上巻下巻からなり、4000語余りの名詞、一字語・二字語・三字語・四字語や常套語、69例の日常会話が取められた語彙集である。このような編纂は、『華英通語』（1855）・『新增華英通語』（1893）³⁾などの英語学習書にもみられる。

③ 『東語正規』（1900）

本書は1900年（明33）上海の作新社から出版された。著者は日本への最初の留学生である唐寶鏐と戢翼聿である。本書は変法や日本の文明導入のための人材育成を目的に、留学生用日本語教材を中国語に翻訳し、日本で印刷したもので、実際には1901年冬に中国本土に入る⁴⁾。本文は全三巻244頁、語法、散語・問答、類語語訣、附泰西哲十三則からなる総合的教材である。語法は口語文典を参考に体系的かつ詳細に解説されている。散語には約2300語の語彙、問答には約1100用例の日常基本会話が列記されているが、これらは体系的に編纂されていないため学習し難いと思われる。

④ 『日語入門』（1901）

本書は1901年（明34）東京の善隣書院から出版され、1907年（明40）までに第六版が出版される。著者の長谷川雄太郎は広東同文館東文教習長であり、当時日本語教材がなかったことから本書を編纂したと序文で述べている。本書は全268頁、本文は「日語入門」と「造語篇」の二篇からなる会話教材である。「日語入門」には約2800の語彙が収録され、「造語篇」全90課には助詞・語尾変化・現在過去未来・敬辞などの文法が中国語で簡単に説明されている。同書は会話能力の習得を主要目的とした学習内容だが、体系的な構成になっていないことが大きな欠点といえる。同氏の図書目録に台湾総督府民政局学務部出版の教科書が記されており、同書はそれらを参考に制作されたようである⁵⁾。

⑤ 『東文易解』（1902）

3) 内田慶市2009「ビジン—異言語文化接触における一つの現象」『言語接触とビジン』pp 1-13。東京：白帝社。

4) 劉建雲2005『中国人の日本語学習史—清末の東文学堂』p.235。東京：学術出版会。

5) 劉建雲2005『中国人の日本語学習史—清末の東文学堂』p.234。

本書は1902年7月（明35）に泰東同文局から出版され、筆者は国語学者大矢透、中国人教師金国璞と張廷彦である。本書は日本語の文章を読解するための指針を与えることを目的とした読解教材であり、前編と後編からなる。前編は、基本的な日本語の構文と中国語の構文とを対照し、両構文の違いを解説する。後編は、孔子家語一章・論語一則・大日本帝国憲法などの読習文が17文収められている。

⑥ 『東語完璧』（1903）

本書は1903年（光緒29）に上海の新智社から出版された。全六篇からなる初中級者向け会話教材である。「第一篇発音」は『東文易解』の図と発音方法を完全に模倣し、「第二篇説話法標準」・「第三篇問答法標準」は『東語初階』の内容を構成し直したものである。第四・五・六篇は著者自身が編纂し、場面別会話と練習問題、語彙が収められている。

2. 『東語初階』と『東語真伝』

2-1 『東語初階』と『東語真伝』の出版事情

(1) 書誌と出版の動機

『東語初階』は1902年8月（明治35）に泰東同文局から出版された。縦24cm 全65丁の和装で、「大日本貴族院議員 前高等師範學校長 伊澤修二辯言、泰東同文局撰、大日本東京、泰東同文局」と扉にある。奥付には、「明治三十五年七月、光緒二十八年六月 刊行」とある。1903年と1906年に改正版が出版された。出版の動機について、伊澤修二の弁言に次のように述べられている。

東中交通垂二千載、隋唐時代我學於中、惟時有古今、道有隆汚、勢會遷流、自不能避、今欲以擒擷於遯方者輸引於比隣。敢曰盡東亞之責任、亦聊以酬夙昔之豪情階梯何在、語言其先、此本書之所由著也。

すなわち、日本は隋唐時代に中国から学んだこと、情勢は変化していること、日本は遠方のよいものを近隣の国々へ伝える責任があること、それには先ず言語が必要であるために著したとある。また、1905年には『韓訳重刊 東語初階』が出版されている。その序文に、

……彼處學校中凡列有東語科者、莫不援此為教課善本焉、窃惟清韓皆吾鄰也、即便益於甲鄰、尤不可不便益於乙鄰、況韓京南北鐵路開通伊邇、自後交際日繁、往來月密、彼此語言、相互為用者、愈覺不容緩矣、……蓋道途之交通、不離乎船車、而意思之相達貴乎、語言藉以暢達兩國士民之交情、不獨泰東文局推廣之榮亦足以增長兩國國際之幸福、故敘此一言云爾

のように述べられ、『東語初階』が中国の日本語科において善本の列に入る教材に挙げられてい

る。また、韓訳重刊を出版した動機として、日本の隣国である清韓両国に利益を与えるためであること、韓国盛京間鉄道の開通に伴い両国の交流が盛んになることから、言語を学習して清韓両国民の相互理解や友情をスムーズにしてもらうためであることが述べられている。

『東語真伝』は1903年3月（明治36年、光緒29年正月）に出版された。全79丁の和装、「帝国大学文科大学長文学博士 井上哲次郎序、大日本国貴族院議員 大清国欽賜二等宝星伊澤修二 閱、大日本東京、泰東同文局撰」と扉にある。奥付には、「明治三十六年二月、光緒二十九年正月 刊行」とある。井上哲次郎の序文に「今如中國。亦欲刷新百度。努力經營。以發揚國威。則明治往事。可以為師也。儻期之乎。宜以日本語為」のように、国威を奮い起こすために明治を師とするならば、日本語を鍵にするのは当然であると述べられている⁶⁾。

(2) 伊澤修二について

伊澤修二は明治初期の教育界に貢献した教育者である。1851年信濃国伊那郡高遠町に生まれ、1867年、和洋の学を志し蘭学を学び、中浜万次郎や米人宣教師について英語を学ぶ。1870年、開成学校に進学、1872年文部省に入る。1875年米国へ留学し、グラハム・ベルから視話法を学び、さらに音楽教育や聾啞教育も研究する。1879年から東京師範学校、東京音楽学校・東京盲啞学校の校長を歴任。1886年、第一次伊藤内閣の下で文部省編集局長として教科書の編纂などに務める。民間では国家教育会を創設する。日清戦争後の1895年、台湾総督府の学務部長として台湾に赴任し、日本語教育の確立に尽力した。1897年勅選貴族院議員となる。1900年に教育界から退いた後、1903年に「楽石社」を創設、視話法をもとに国語・日本語などの吃音矯正をおこなう。中国語の分野では、『日清字音鑑』⁷⁾ (1895)・『日台小字典』 (1898)・『視話応用清国官話韻鏡音字解説書』⁸⁾ (1906)・『同文新字典』 (1909)・『支那語正音発微』 (1915) など日本語・中国語・台湾語・韓国語の音韻や発音に関する書を著す。67歳で死去。

6) 序文を著した井上哲次郎は明治・大正期の哲学者であり、日本最初の哲学辞典『哲学字彙』(1881)を編纂したことで有名な人物である。

7) 『日清字音鑑』は少しの記号を用いて日本語の字母と中国語の発音を対照した書である。同書以前に発音をとりあげた書籍はほとんどない。六角恒広1961『近代日本の中国語教育』(p.144)。東京：播磨書房。

8) 『視話応用音韻新論 附録：視話応用清国官話韻鏡音字解説書』で伊澤式字母が作り出される。六角恒広1961 p.189-152。安藤彦太郎1988『中国語と近代日本』(p.87-92)。東京：岩波書店。

(3) 泰東同文局

『東語初階』と『東語真伝』の出版元である泰東同文局は、伊澤修二が1902年（明35）に東京小石川に設立し、中国向けに日本語教材を制作出版することを目的とした出版社である。中国での出版開始に際し、伊澤修二本人が北京の士官学校教官多賀宗之⁹⁾に書簡を送り、清国向け図書の出版を積極的に依頼している¹⁰⁾。これまで泰東同文局の存在についてはあまり知られていない。しかし、同局の出版図書は清国皇帝皇后に喜納され、それによって伊澤修二は1903年清国が外国の重要な来賓に与える勲章、二等双龍宝星を受ける¹¹⁾。また、1907年に同出版社が株式組織に改組され伊澤修二が顧問、藤山雷太が社長になった際、近衛篤磨・小村寿太郎ほか19名余の株主は当時の名流であり、清国でも袁世凱など賛成者が多かった¹²⁾。以上のことから、泰東同文局は中国から一定の評価を得ていたと言える。

販売所は、設立当時は東京文局のほかに販売所が日本に7箇所、中国の北京と上海に各1箇所だったが、1907年の販売所は日本に8箇所（台湾を含む）、中国にいたってはその数が40箇所以上のぼった。泰東同文局から出版された図書は1902年から1907年（明40）までの5年間で26冊を数える。しかし、藤山雷太が社長になった後の同社の目的は、教材のほかに教育用機械器具や文房具を販売するなど営利主義に変わっていく。1910年に同社は営業不振のため営業停止に追い込まれる。その理由として、『藤原雷太伝』に「書籍は支那人が翻刻そして売出しても著作権法がなく、その権利を侵害されても之に抗議するに由なく、営業上幾多の困難に遭遇した」とあり、日本の学習書を模倣したものが中国で出版されたことをあげている¹³⁾。また日露戦争後の清国の排日運動や銀貨の大暴落なども理由の一つに考えられる。

9) 六角恒広1961 P.172。汪向荣著・竹内実監訳1991「日本教習分布表」『清国お雇い日本人』。東京：朝日新聞社。

10) 多賀宗集著「伊澤修二書翰五通一附 福島安正書翰一」（日本歴史学会編集『日本歴史』（1986年6月号第457号 pp.40-43）。吉川弘文館。

1. 借弊局出版書之儀ニ就き御親切ニ被仰下奉謝候即書記ノ者ニ申付置候ニ付、各種之書籍二部宛進呈仕候筈ニ御坐候。御閑暇之節御一読被下、猶貴地人士間ニ御紹介被下候ハ、大幸之至ニ御坐候。又日本語学習ハ近々中に東語真伝出版之筈ニ有之、……出版次第送呈可仕候間、御序御紹介被下度奉願候（2月27日付書簡）

2. 御言葉ニ甘ハ今般各種図書各三十部局員ニ申付送付為致候間、御鑑識を以て相当之商人ニ右発売方命し被下候ハ、誠ニ大幸之至ニ御坐候。売捌ニ関する振合等ハ局員より可申上候得共、猶御心付之廉も有之候ハ、御注意被下度候。（3月28日付書簡）

11) 多賀宗集著「伊澤修二書翰五通一附 福島安正書翰一」2月27日付書簡。

12) 西原雄次郎編纂1939（S14）『藤山雷太伝』。東京：千倉書房

13) 1903年に上海で出版された『東語完璧』は『東語易解』（1902）と『東語初階』（1903）を模倣している。

2-2 『東語初階』の内容

伊澤修二の弁言に次のように述べられている。

邇來讀東文者日眾，著東語初學本者日夥，此固我兩邦慶事也。所惜者都屬於貿易家言，……宜於商賈，尤宜於文人學士也。

すなわち、『東語初階』は商売にも適し、特に読書人や知識人に適した教材として編纂された。

『東語初階』は「発音篇」・「第一篇説話法」・「第二篇問答法」からなる。「発音篇」には五十音図・濁音図・次清音図・轉音図・拗音図・長音図・促音図・音勢図が挙げられてある。各発音はカタカナで書かれた日本語の字母を中心に、その下に補助記号付のローマ字と中国語とが併記されている。また、濁音など中国語にない発音には中国語だけが記されている。

(1) 「第一篇説話法」

「第一篇説話法」は全22課から成り、その習得目的は、弁言に「第一篇首掲日清兩國造句之方式，字分句析一目了然，即知兩國措辭不同之，……（第一篇はまず日清兩國の作文の方法である。漢字や文を分析すると一目瞭然であり、直ちに両国の言葉遣いの違いを知る。）」とあるように、日中の文作りの方法、つまり両国の語順の違いを理解することである。弁言にその方法が、

篇中造句方式，以□為記者，則可以名字或代名字補之，以、、、為記者則可以動字或狀字補之，以△為記者則可以勢字虛字介字或聯字補之，……

(文作りの方法は、□で記すものは、即ち名字あるいは代名字を補うことができ、、、で記すものは動字あるいは狀字を補うことができ、△で記すものは勢字虚詞介詞或いは聯字を補うことができる。)

とある。例えば第二課の学習は、以下のような進み方である。

まず、基本文型を記号を用いて次のように挙げ、語順の違いを意識させる。

□ ヲ クダサイ 請 給 我 □
ミヅ ヲ クダサイ 請給 我 水

さらに「練習」の部で、以下のように人称代名詞や「ヲ(把)」の学習を加え、基本文型を発展させる。

ワタクシ/アナタ/アノヒト ニ クダサイ/アゲマス 請給我 給 你/他
コレ/ソレ/アレ ヲ アゲマス/クダサイ 給 你/請給我 這個/這個/那個
コノ/アノ/ソノ □ヲ アゲマス/クダサイ 把/請把 這個/那個/這個 □給你/我

このように発展させた文型は、「練習」の中で繰り返すことによって、応用文法が自然と身につ

くように配列してある。

基本文型はその数が全22課で20余になり、表現別に編纂されている。次のとおりである。

第1課～第13課は「□ヲ アゲマス」・「□ヲ クダサイ。」「□ ヲ カシテ クダサイ / アゲマス」・「…ナサイ」・「オ…ナサイマスナ」など受給・丁寧な依頼・丁寧な命令や勧誘・軽い禁止文、14課は「ショウチシマシタ・イヤデアリマス」の承諾・拒否の文、15課は「ホシイ。…タイ。」要求・願望の文、16・17課は「□ガ / ハ アリマス / アリマセン。」、18課は「□ハ□ダトオモイマス。」、19課～22課までは「時異法」である。「時異法」とは、「現在・過去・未来」の時制のことであり、例えば、「現在」は「□ガ…マス・マセン」、「過去」はマシタ（…過 / …了）・マセンデシタ（没…過）、「未来」は「マセウ・マスマイ」である。ただ、「……過」「……了」を「過去」としている点は現代中国語の文法とは異なる。

(2) 「第二篇問答法」

「第二篇問答法」は全10課からなる。基本文型、応用文とも以下のような疑問詞疑問文だけが挙げられており、応答文は示されていない。

何 此レハ何デアリマスカ 甚麼 這是甚麼
汝ハ紙ニ何を書キマスカ 你在紙上寫甚麼

このほか、何ダトや何がなどの用例が挙げられている。疑問詞は以下のようにほぼ網羅されている。

何（甚麼）・誰（誰 那位）・何処 何辺（那兒 甚麼地方）・イツ イツ頃（多啻 甚麼時候）・何 {年月 日 時} 頃（{甚麼 幾}{年 / 月 / 日子 / 點鐘}）・幾 {個 許 錢 日 年 歲 程 位 許 宛}（幾 多少 {個 / 錢 / 天 / 年 / 歲 / 年紀}）・幾 何 {帖 人 本 枚 冊 程 許 位 宛}（多少 幾 {套 / 人 / 管（枝） / 張 / 本} 上 下）・如何様 如何様物 如何云物（怎麼樣 甚麼様子 甚麼東西）・如何 如何シテ 如何スル 如何シマシタ 如何シヤウ（甚麼 做甚麼 做甚麼 做甚麼了 要做甚麼）・何故（為甚麼）。

『東語初階』は文法について一切説明していない。すなわち、同書の学習方法は、日中の語順の違いを文型の反復練習によって理解させる方法なのである。

2-3 『東語真伝』の内容

『東語真伝』は、弁言に「讀此書者。若先將本局曩日所刊之東語初階。研究一過。則既能辨別中東措辭之異同。而東語文法之大旨。還求諸此書。自易如破竹矣。」と述べられているように、『東語

初階』を学習済みの学習者が第二ステップに進むために文法を中心に編纂された教材である¹⁴⁾。

本書の構成は、「第一篇運用字母法」と「第二篇合成句話法」からなり、本篇に入るまえに五十音図などの音図がある。本書の主要な学習内容である「第二篇合成句話法」について弁言に次のように述べられている。

此書第二篇。合名字、代名字、介字、形容字、副字、動字、助動字、接續、嘆字等。種々連結綴屬之法。連類説明。又就各字類。於文法上之關係。逐遞解釋。列二十餘式。俾為初學典型。……

(この書の第二編は、名字・代名字・介字・形容字・副字・動字・助動字・接續字・感嘆字などを合わせる。いろいろな連結法、連結の説明、また各字類、文法の関係については、順次説明する。20余りの式を並べ初学の典型にする。)

本書が『東語初階』と異なるところは品詞についての説明を加えた点であり、品詞を用いて「式」、つまり文型が示されている。これらの品詞は『東語初階』の記号を品詞に替えたものであるが、品詞名は『東語初階』で用いられた名称と比べて現代の品詞名に近づいたといえる。例えば、『東語初階』の状字・勢字・聯字・虚字などである。

「第二篇合成句話法」は全27課からなる。全課で20余の文型にそれぞれ15から30程度の例文が挙げられ、例文の中で最初の2-3文にのみ中国語の対訳が付されている。文法は9品詞の意味・用法について順次簡潔に説明されている。介字については「ニ・ヤ・カ・ヲ・ハ」など7種が挙げられ解説されている。例えば、「第三課」では先ず以下の文型をが示され、

代名字…介字ノ…名字

次に「介字」の意味を、以下のように説明する。

代名字與名字相連、及名字與動字相連、徃徃有字以貫之。此類字、向無名、今名之曰介字、因其介于兩字間也。惟以上下字義之不同、而介字取義亦畧有異。

(代名字と名字が相連なる、及び名字と動字が相連なる、往々にしてこれを貫く為に字がある。この類の字かつて名称がなかったので、今これを介字と称す。2つの字のあいだに介字が介在しているためである。ただ、上下の字の意味の違いで介字は意味を取り、少々違いもある。)

次に、介字「ノ」の用法を説明する。

作之或的解、示所有之意、文法中、即在介字之列、……

14) 伊澤修二から多賀宗之への書簡に、『東語初階』と『東語真伝』とを併用すれば完璧であることが述べられている。

「多賀宗準1986「伊沢修二書翰五通」3月28付書簡¹⁴⁾:「二白 今般出版相成候東語真伝ハ、前々発行相成居候東語初階と併用致ハ、稍完璧と可申歟と奉存候」

(之あるいは的の字に解釈し、所有する意味を示し、文法の中で、即ち介字の類に属す。) 最後に以下の例文が示されている。

(一) 私^{ホン}ノ本 我之書, 我的書 (二) 汝^{ソロバン}ノ算盤 (三) 彼^{テチョー}ノ手帳

以下に「合成句語法」の内容を一部あげておく。

課	文型	用例 (日本語・中国語)	文法
第1課	名字	^{テン} 天 ^チ 地 ^{ヒト} 人など	名字の説明
第5課	名字…介字ニヤカ…名字	^{マツ} 松 ^{ツル} ニ鶴 (鶴在松)	介字ニ・ヤ・カの説明
第6課	形容字イ…名字	^{オホキ} 大 ^{ウシ} イ牛 (大的牛, 即大牛)	形容詞の説明
第8課	副字ニ・ニモ・モク…形容字…名字	^{ヒジョウ} 非常 ^{タカ} ニ ^{ヤマ} 高イ山 (格外高的山頂)	副字の説明
第9課	名字…介字ガヲハ…動字	花ガ咲ク (花是開, 即花開)	動字の説明・介字ガヲハの説明
第14課	名字…介字…動字…助動字マス・マシタ・マセウ	マセヌ・マスマイ・マセナン ダ ^{カラス} 烏ガ ^ナ 啼キマス (烏鴉啼)	助動字の説明 マス・マシタ
第23課	名字…介字…動字…接續字…名字…介字…動字	腹ガ減ルカラ飯ヲ食ウ (因為肚飢所以吃飯)	接續字 から・でも・けれども

このように、『東語初階』は、①短文を用い、②記号を用いた基本文型による練習をさせ、③文法の解説を加えずに、④文法上の規則を加えた応用文にいたるという配列になっている。学習者は先ず『東語初階』で日中の語構造を理解したうえで、次に『東語真伝』で文法を学習し、会話に役立たせる。両教材の記号や品詞を用いた文型は煩雑でわかり難い点もあるが、文型練習を採り入れ、体系的に編纂された教材は先にあげた初期の日本語教材にはみられない学習方法である。そういう意味で両教材は新しい学習方式の初級日本語教材といえる。両書とも伊澤修二の弁言があり、特に『東語真伝』は自ら校閲していることから、編纂に伊澤修二が大きく関わっていると考えられる。

3. 『東語初階』と台湾の日本語教材

伊澤修二が主に編纂したと考えられる『東語初階』・『東語真伝』の学習方法はどこからきたのか。その学習方法は、『東語初階』出版より7年前の1895年、台湾人向け日本語教材にみられる。

伊澤修二は1895年5月（明28）に台湾総督府学部長（赴任当初は学部長心得）として台湾に到着すると、土語研究・会話集の編纂・土人の教育に着手した。台湾の日本語教育について伊澤修二は次のように述べている¹⁵⁾。

……第一に台湾に於いて教へなければならぬのは、話し言葉である。……台湾人に如何に教ゆるかと云ふことは、是は、中々六々しい問題であるのであります。併し是も先づ我輩自ら研究し、略々其道を得て、今日では、どうかこうか不都合のないだけにやつで居ります。……

すなわち伊澤修二は話し言葉の習得を第一目的としたのである。そして1895年に『日本語教授法』、1896年に『台湾適用会話入門』を出版する。以下に両書について簡単に紹介する。

① 1895.11 台湾総督府学務部『日本語教授法』。発行秀英舎。

本書は、一定の教育があり古典漢文を読解できる青年生徒の学力を標準として編纂された教授書である。「語学初歩」・「日本文法」・「字音変化」の三部で構成される。

その中で全体の大部分を占める「語学初歩」の学習の進め方は、まず、50音から入り、次に名詞、代名詞、テニヲハなどの順序に進む。例えば、「次ニ、代名詞ノ普通ナルモノヲ教フ」と記して用例をあげたあと、「次ニガ、ノ、ニ、ヲ等（テニヲハノ初歩）ヲ教フ」と記し、その例に「ワタシガ ユキマス 我 去」を挙げる。続いて「次ニ普通ノ動詞若干ヲ授ケ兼子テ其応用ヲ教フ」と記し、その用例に「ワタシ ハ ホン ヲ ヨム 我 書 読」を挙げる。この学習法は、文の「型」は提示されていないが、文型形式の方法である。また、日本語の例文の表記方法にはカタカナが使用され、それに中文対訳または台湾対訳が適宜付される。

本書は、文型練習・作文練習・対話練習が一セットで進む。その中でも対話練習を重視しているようだ。最初は文型練習だけだが、学習が進むにつれて先ず文型を学習し、その文型を利用して作文をさせ、教師と生徒がその作文を用いて対話練習をおこなう。「日本文法」では、名詞・動詞・形容詞・副詞などについてごく簡単に説明した後、すぐに顧客と商人・官人と人民・貴人と生徒などの場面別会話に入る。ここで特に重視しているのは敬語の使い方である。

15) 伊澤修二は1897年（明30.5.22）、台湾諸学校官制改正、公学校令実施の件にて上京中、帝国教育会に於いて演説する。「台湾公学校設置に関する意見」『伊澤修二選集』（1990）pp.616-617。

② 1896.11 台湾総督府民政部¹⁶⁾『台湾適用会話入門』東京：英舎工場印刷。

本書は、一冊全39葉、第一部と第二部で構成される。本文には台湾語の対訳が付く。対訳は、緒言によると、本部の要請で国語学校教諭4名のほかに台湾人教員の柯秋潔と陳兆鸞が編集を担当している¹⁷⁾。柯秋潔は土人教育開始の第一期生である¹⁸⁾。

緒言によると、第一部は請求・諾否に関する表現の習得、第二部は疑問・応答による日常会話と語法による言語の習熟を目的とする。学習方法には○○・△△の記号を使用した文型形式を採る。第一部は15葉、全27課。学習内容は請求・諾否・軽い命令・肯定否定である。例えば、14課 ○○カラ○○ヲ 借テ 来テ 下サイ。/ 来 ナサイ、2課 願ヒマス、24課 ○○ニ /へ、△△ヲ 捨/放 テ 来テ 下サイ、などである。第二部は24葉、全26課、「何処 ○○ガ、ドコ ニ アルマス カ。」など疑問詞を用いた問答形式を採る。

このように、『台湾適用会話入門』は『東語初階』とほぼ同じ体裁である。『日本語教授法』と『台湾適用会話入門』はいずれも台湾総督府民政局学務部が編纂したものだが、編纂に伊澤修二が関与していた可能性は充分にあると考えられる。以上のことから、『東語初階』と『東語真伝』の編纂にあたり伊澤修二は、『台湾適用会話入門』の不完全な部分、例えば○○と△△の使用が不明確である点、日本語学習者にとって難しい助詞と時制の練習がない点などを『東語初階』で改善し、『東語真伝』で簡単な文法を解説し、初級日本語教材としての内容をより充実させたと推察する。

『台湾適用会話入門』が出版された翌年の1897年7月に伊澤修二は台湾を去る。その後、伊澤修二の文型練習を採り入れた学習方法は、台湾公教育の教科書に盛り込まれていったのである。例えば、台湾総督府著『台湾教科書国民読本』（1901-1903）に「オトコノコガ、オキマシタ。」「オンナノコガジヲカキマシタ。」、台湾総督府編『公学校国語教授書』（1913）に「コレ（ソレ）ハ ○○デス」「コレ（ソレ）ハ ナンデスカ」、台湾総督府原著『公学校用国民読本』（1913-1914）に「ハカリガアリマス」「キノハガアリマス」などである。

16) 緒言によると、同書は東京盲啞学校教諭石川倉次の草案を修正した教科書であり、台湾人の国語教育と日本人の台湾語教育とを学習目標として制作された。石川倉次は点字・点字器・点字ライターを開発するなど「点字の父」といわれる。また、対訳は、緒言によると、本部の要請で国語学校教諭4名のほかに台湾人教員の柯秋潔と陳兆鸞が編集を担当する。

17) 信濃教育会編集（S32）「伊澤修二年譜」『井沢修二選集』。長野市：信濃教育会出版部。

18) 信濃教育会編集（S32）「伊澤修二年譜」『井沢修二選集』。

4. 伊澤修二と日本の英語教材

『東語初階』の文型練習は台湾の日本語教材を改善したものであると考えられる。それでは、伊澤修二が台湾教材に採り入れた文型練習はいったい何を参考にしたのだろうか。

日本における語学教育は、新政府が1869年に英語教師による授業を開始し、語学を正則、読解を変則と定めたことがその最初である¹⁹⁾。さらに1870年に「諸生徒ヲ正則変則ノ二類ニ分ケ正則生ハ教師ニ従イ韻学会話ヨリ始メ変則生ハ訓読解意ヲ主トシ教官ノ教授ヲ受クヘキ事」のように²⁰⁾、外国語教育において正則は教官について韻学会話より始めると定められた。

第一次伊藤内閣において、森有礼が初代文部大臣になると英語教育が重視されるようになり、明治期に最も広く用いられたといわれる最初の翻訳英語教科書「ニュー・ナショナル・リーダー」全5巻が1885年(明18)に出版された²¹⁾。同書は母語者用を翻訳したものである。その第一巻について、外山正一は『英語教授法』の中で、同書は日本人学習者に適さない内容の文章であり、母語者用の訳本を教科書用として使用してきたことは一大弊害だと述べている²²⁾。しかし、1885年から1889年までの4年間、同リーダーの訳本・解説書が多数出版されるのである²³⁾。

1889年、外山正一著“The Monbusho Conversational Readers”『正規文部省英語読本』(1889-90)が出版される²⁴⁾。序文の中で著者は、「変則英語」は英語教材の真の意味を明確にすること

19) 西欧における外国語教育は、ラテン語時代からの伝統的な文法訳読法が中心だった。しかし19世紀中頃、訳読法に対する批判として、外国人によって外国語のみを教える教授法、Direct Method (直接法)が欧米で提唱される。まさに同時期に日本においてもDirect Methodが提唱される。田崎清忠編集責任1995『現代英語教授法総覧』。東京：大修館書店。

20) 「大学南校規則」第7条。田崎清忠編集1995 p.347。東京大学百年史編集委員会1984『東京大学百年史通史1』p.160。東京：東京大学。大学南校は開成学校の後身、後の東京大学である。

21) 同教科書は1883~1884年に米国Barnes社から出版された小学校用読本を翻訳したものであり、母語としての英語の総合的な運用能力を高めることを目的としている。大村喜吉・高梨健吉・出来成訓編集1980『英語教育史資料第3巻英語教育の変遷』。東京：東京法令出版。

22) 外山正一著1897(明30)『英語教授法 附正則文部省英語読本』p11-12。(国会図書館蔵)

23) 例えば、嵩村道高訳『New National Readers No 1 附音訓点直訳翻訳 改正再版 正則ニューナショナルリーダー 第一 独修便法』(1886、明19東京：東崖堂蔵版)、山田重正刊『NEW NATIONAL READERS. FIRST READER. ナショナルリーダー第一読本』(1889、明22TOKYO：S.YAMADA & COMPANY)などである。

24) 外山正一 1889-90、“The Monbusho Conversational Readers”『正規文部省英語読本』。文部省編輯局(国立国会図書館)。外山正一(1848-1900)は明治の教育文化界において幅広く活躍した。1866年渡英、1870年渡米、1871年ミシガン大学に入学。1887年東京大学教授、東京大学総長・貴族院議員、第3次伊藤博文内閣の文部大臣などを務める。日本語のローマ字化推進のため『羅馬字会』を結成して漢字や仮名の廃止を唱えたことでも知られている。

ができない、英語で考えるという最も重要な習慣の獲得を妨げる、と批判する²⁵⁾。それでは、『正規文部省英語読本』とはどのような教材なのか。『英語教授法』に、『正規文部省英語読本』はドレイスプリングの独逸語教科書を参考に行っていること、独逸語教科書は簡単な句文・反復練習・整然とした訓練法であること、また『正規文部省英語読本』の特色は独逸語教科書を参考に日本人の英語における特別の難点に注意し、文法上の事項を次第に習得できる仕組であることが述べられている²⁶⁾。

本書全5巻の構成は、例えば、Lesson IIIでは「What is ~? It is ~. This is ~.」の文型が示され、Lesson IXでは「How far ~? How much ~? Which road ~? What books ~? How long ~?」のように疑問詞疑問文の文型と「Not very far. None at all.」などの回答が対話形式で示されている。学生は教師の後について文型を数回繰り返し、次に単語の置き換え練習をする。第3冊からは最初に読み物があり、次にその内容に関する問答形式の会話文がある。文法説明と日本語の対訳はない。

このように、短文の文型を用いた反復練習によって、文法を説明せずに文法上の規則が学べる学習方法が、『正規文部省英語読本』（1889）に初めて取り入れられたのである。

伊澤修二の『日本語教授法』（1895）と『台湾適用会話入門』（1896）にもこれらの特色が認められる。伊澤修二は1886年から初代文部省編集局長として教科書の編纂にたずさわり、世界の外国語教育の動向や外山正一の学習方法など英語教科書の状況についても知っていたと推察する。伊澤修二は英語教材を参考に、台湾人に適した日本語教材を模索し、例えば伊澤修二の台湾の教材には作文練習と台湾語の対訳があるが、英語教材にはそれがないなどの改善を施し、編纂したと考えられる。

おわり

1895年、日本語教育の命を受けて台湾に赴任した伊澤修二は、台湾において言葉の習得を目的とした『日本語教授法』（1895）と『台湾適用会話入門』（1896）を出版した。これらの教材は台湾の日本語教材に引き継がれていくのみならず、また中国で出版された『日語入門』（1901）の参考にもされる。中国では、伊澤修二は台湾の日本語教材に改善を施し、『東語初階』（1902）・『東語真伝』（1903）を出版する。さらに『東語初階』は中国で出版された『東語完璧』（1903）に模倣される。日本では、『東語初階』の文型形式の学習方法は『日語指南』（1904）や『日本

25) 『正規文部省英語読本』序文。

26) 外山正一1897『英語教授法 附正則文部省英語読本』pp.25-26。東京：大日本図書。（国立国会図書館）

語教科書』(1906)など当時盛んに使用された教材にもみられる。韓国では『韓訳重刊東語初階』が出版される。

以上のことから、『東語初階』・『東語真伝』は、日本・中国・台湾の日本語教材発展の過程における先駆と位置づけられる教材であると考えられる。そして伊澤修二の目的は、日本語を通して日台中韓の交流や近隣の国々に欧米の新知識や新情報の導入を促すことであった。